

短 報

高齢入院患者のためのせん妄等予防・入院支援プログラム Hospital Elder Life Program in St. Luke's (HELP in SL) の導入と初期評価

—聖路加国際大学看護学部老年看護学・聖路加国際病院・
看護学生ボランティアの協働から—

亀井 智子^{1) 2)} 川上 千春¹⁾ 金盛 琢也¹⁾ 桑原 良子³⁾
山本 由子⁴⁾ 内山真木子⁵⁾ 岩崎寿賀子⁵⁾ 福島 阿衣⁵⁾
田中万里子⁵⁾ 柳橋 礼子⁵⁾ 柏木 早穂⁶⁾

Implementation and Evaluation of the Hospital Elder Life Program in St. Luke's (HELP in SL) to Prevent Delirium in Older Adult Inpatients

—A Collaborative Project of the Gerontological Nursing Department at St. Luke's International
University's College of Nursing, St. Luke's International Hospital, and Nursing Student Volunteers—

Tomoko KAMEI, RN, PHN, PhD^{1) 2)} Chiharu KAWAKAMI, RN, PhD¹⁾
Takuya KANAMORI, RN, MSN, CNS¹⁾ Yoshiko KUWABARA, RN, MSN, CNS³⁾
Yuko YAMAMOTO, RN, PhD⁴⁾ Makiko UCHIYAMA, RN⁵⁾
Sugako IWASAKI, RN⁵⁾ Ai FUKUSHIMA, RN⁵⁾ Mariko TANAKA, RN⁵⁾
Reiko YANAGIBASHI, RN, MN⁵⁾ Saho KASHIWAGI⁶⁾

[Abstract]

The Hospital Elder Life Program in St. Luke's (HELP in SL) provides elderly patients with a comfortable stay, where nursing student volunteers visit their bedside. This program was developed by a HELP in SL team comprising members of the Department of Nursing, faculty of gerontological nursing, and students from the college of nursing at St. Luke's International University. Objectives included maintaining the cognitive and physical functions of high-risk elderly inpatients such as those with delirium, and allowing these patients to spend their time as autonomously as possible until discharge.

Selection of subjects and prior explanations were handled by the HELP in SL coordinator from the Department of Nursing. The ward nursing administrators dealt with the physical and psychological assessment of subjects to determine if their conditions were suitable immediately prior to providing the service, and safety management. Faculty in the college of nursing handled other items including recruitment and training of nursing student volunteers, preparation of necessary items, and creation of assessment forms, report sheets, aprons, rosters, and practice guidelines. The trial commenced in two wards in mid-September 2015.

- 1) 聖路加国際大学看護学部 老年看護学 St. Luke's International University, College of Nursing, Gerontological Nursing
- 2) 聖路加国際大学研究センター PCC 実践開発研究部 St. Luke's International University, Research Center, Department of PCC Development
- 3) 聖路加国際大学教育センター St. Luke's International University, Education Center
- 4) 武蔵野大学人間科学部 Musashino University, Department of Human Sciences
- 5) 聖路加国際病院看護部 St. Luke's International Hospital, Department of Nursing
- 6) 聖路加国際大学看護学部・学士編入17回生 St. Luke's International University, College of Nursing

受付 2015年10月29日 受理 2015年10月29日

In total, the HELP in SL service was provided 20 times to six females (mean age : 91.5 ± 7.7 years) during the first month, and involved reading and discussing newspapers, reminiscence therapy, and other support. The HELP in SL can be an innovative support model for elderly inpatients with a novel cooperation system between Department of Nursing in the hospital, college of nursing, and nursing students.

[Key words] Hospital Elder Life Program (HELP), hospitalized, older adults, prevention of delirium

〔要旨〕

せん妄等のハイリスク高齢入院患者の認知・身体機能を維持し、退院まで最大に自立した状態で過ごすことを目的として、ベッドサイドに看護学生ボランティアが訪問し、快適な時間を提供する聖路加版 Hospital Elder Life Program (HELP in SL) を聖路加国際病院看護部、看護学部老年看護学教員、看護学部学生による HELP in SL チームにより開発した。

看護部 HELP in SL コーディネーターは対象者の選定と事前説明、病棟看護管理者は当日の対象者の心身状態の確認と安全面の管理、看護学部教員は看護学生ボランティアの募集と教育、必要物品の用意、アセスメント票・報告シート・エプロン・ローテーション表・実践ガイドなどの作成を担当し、2015年9月中旬から週2回の頻度で2病棟で試行を開始した。開始1カ月間に6名（平均年齢91.5 ± 7.7歳、すべて女性）に対し、新聞の読み語り、回想法など、延べ20回の HELP in SL を提供した。

HELP in SL は病院看護部と看護学部、看護学生間の新たな協働方法による高齢入院患者への支援モデルとなり得ることが示唆された。

〔キーワードズ〕 Hospital Elder Life Program (HELP), 入院, 高齢者, せん妄予防

I. はじめに

入院高齢者の10~40%にせん妄が出現する¹⁾といわれ、入院中のせん妄予防の継続的な取り組みは、高齢者へのケアとして重要である。ハイリスクの高齢入院患者の認知機能、および身体機能を維持し、退院時まで最大に自立した状態で過ごすことなどを目的として、ベッドサイドにボランティアが訪問し、快適な時間を過ごすプログラムとして、Hospital Elder Life Program (HELP) が1997年に開発された²⁾。2000年代に米国の急性期医療機関を中心に普及し、統括本部は米国ハーバード大学に設置され、現在11カ国で200医療機関が導入している³⁾。

HELPの有効性には、医原性せん妄発症率の減少、在院日数の短縮化、入院医療費の抑制などが報告されており¹⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾、高齢入院患者のみならず、医療機関にとっても有用である。しかし、導入する上での院内支援の組織的な課題なども指摘されており⁷⁾、わが国でいかに組織的に取り組むことができるのか、各医療機関に応じた方法を検討する必要がある。

HELPを提供する医療機関には、①HELPコーディネーター、②病棟看護管理者（以下；病棟管理者）、③ケアを提供する市民ボランティア、④各専門職で構成するHELPチームが不可欠である。HELPコーディネーターは入院患者の中から対象者、および各対象者に適したプ

ログラム内容を選定し、病棟管理者は、対象者・家族への説明や当日のプログラム内容を調整する役割がある。市民ボランティアは、事前に高齢者の特性やアクティビティの方法などHELPに関する教育を受け、HELPボランティアとして登録して、活動を行い、これらはHELPチームとして運営することとされている²⁾⁸⁾。

聖路加国際病院看護部では、認知症や高齢者看護の検討グループ（オレンジの会）を2014年度に立ち上げ、看護学部教員も継続的に参加している。その活動の一環として、入院患者の認知機能とケアに関する調査を行い、調査日に入院していた患者401名中65歳以上の者は61.1%、認知機能の低下・興奮・せん妄様症状などを発症していたのは延425件、うち看護師が対応困難とした患者は28名（401名中7.0%）であることを報告している⁹⁾。これらの者には、対象者の認知機能に応じた対応や、混乱を生じさせないような対応方法が望まれ、当院にもHELPの潜在的ニーズがあると考えられた。

一方、看護学部4年次老年看護学ゼミナールでは、HELPについて学習し、履修した学生からHELP活動を実際に行いたいとの発案があった。これらから、看護学部の教員が、病院看護部・病棟と看護学生ボランティアを繋ぐ役割をとることができれば、組織的な課題を解決する方策になるのではないかと考え、本学教育改革推進事業の助成を受けて、聖路加版HELP (HELP in SL) を

本学で開発・導入するに至った。本稿では、導入までの経過と HELP 開始期の評価について報告する。

II. HELP とは

HELP は入院患者の在院中のせん妄予防を目的として、教育を受けたボランティアが多職種チームの一員として専門職と協働し、対象者のベッドサイドにおいて治療的アクティビティや早期離床などを提供するプログラムである。HELP を運営する多職種チームは、老年科医、看護師 (Elder Life Nurse Specialist)、ソーシャルワーカー (Elder Life Specialist)、教育を受けたボランティアによって構成される。ボランティアにより提供される HELP の内容は、リアリティオリエンテーション、治療的アクティビティ、早期離床、視聴覚の調整、水分・食事摂取の支援、睡眠への支援などである。ボランティアは12~16時間の講義と12時間の HELP の見学 (演習) を受け、スペシャリストの指示によって、多様な介入を提供することが特徴である。

ミシガン大学では、エルダーライフスペシャリストが全入院患者の中から70歳以上の者をリストし、その中から HELP の適応者を毎日抽出している。また、ボランティア養成、シフト作成の役割も担っている。修士課程で老人看護の専門教育を受けたエルダーライフナーススペシャリストが配置され、エルダーライフスペシャリストが抽出したせん妄ハイリスク者のアセスメント、および追跡を行い、スタッフ看護師への指導も行っている。

HELP によるせん妄予防効果としては、せん妄発症率が HELP 導入前年は41%であったのに対し、導入初年度で26%に減少し、7年後には18%にまで減少でき、高齢者一人当たりの入院期間が2.15日短縮できたという報告がある⁶⁾。また、入院医療費の面では、せん妄の発症を予防したことによって一人当たり1,340ドルを軽減でき、一年間に1,516人の患者に HELP を提供したことで、計203万1,440ドルを削減できたと報告されるなど⁶⁾、高齢者の早期退院と医療費削減に有効なプログラムとして認識されている。

III. HELP 導入までの経過

1. 聖路加国際大学看護学部老年看護学教員側が行った導入までの準備と経過

2015年5月に学部4年次「老年看護学ゼミナール」において HELP について講義を行ったところ、履修者から「自分たちも病棟でこの活動を行いたい」との反応があげられた。そこで、老年看護学教員はこれを実現するための具体的な計画の検討を開始し、オレンジの会に相談を行った。HELP の目的、活動可能な回数、活動内容、ボラン

ティアの募集方法、院内で看護学生ボランティアが活動するための方法、必要物品などを検討し、オレンジの会の病棟ナースマネージャーやメンバーの意見を得ていった。また、HELP 本部とコンタクトをとり、本学で実施する形態が HELP として登録が可能であるのかの確認を行い、ライセンス契約を進めていった。看護学生とは、ボランティア登録システムの作成、活動内容の基準と実践ガイド作り、ロゴマークの作成、活動時に着用するエプロンの選定などを話し合いにより進め、そのための会合を数回開催した。また、サービスマネジメント科目として学生が履修する場合の方法について確認を行った。

看護部管理室に HELP コーディネーターが設置され、教員と対象者の情報を看護学生ボランティアに伝えるためのアセスメントシート、看護学生ボランティアが活動後に記載する報告シート、病室に入室してから退出するまでの安全上確認すべき点、対象者へ配布するリーフレットなどの検討を行い、準備をすすめていった。また、ゼミナール履修者と協働し「HELP in SL 実践ガイド」を編集した。試行対象となった2病棟において、看護スタッフなどを対象とした HELP in SL の説明会を開催し、2015年9月中旬から試行を開始するに至った。

2. 聖路加国際病院看護部が行った導入までの準備と経過

医療技術の発展により、聖路加国際病院においても高齢者への手術等の適応が増え、入院患者の高齢化が進んでいる。2014年度入院患者 (2014年1月・2月の小児・産科を除く総入院患者数) の約60%が65歳以上であり、病棟によっては80%以上を65歳以上で占める現状にある。そこで看護管理者を中心に、認知機能が低下した高齢者のケアの理解と知識を高め、急性期病院におけるケアの実践を検討するために、2014年に先に述べた「オレンジの会」を立ち上げた。その活動の中で看護師の認知症患者の理解とケアのスキルの向上をあわせ、多職種でチームをつくり、入院高齢者をサポートするシステム作りを検討している際に、HELP について知ることとなった。

聖路加国際病院側の導入経過は、2015年5月のオレンジの会で、看護学部老年看護学の教員から HELP が紹介され、その趣旨がオレンジの会の検討事項と合致したため、看護部長にも説明し、導入に向けての活動を開始した。6月には、当院に合致したプログラムの調整、HELP in SL の具体的な導入までの方法などについて検討を始めた。

試行病棟は外科系、内科系から各1カ所ずつとし、高齢入院患者が比較的多い成人病棟2部署を候補とし、病棟管理者、および看護学部老年看護学の教員を交え、具体的な実施回数、実施時間、対象患者などの検討をすすめた。その結果、実施は原則として火曜と木曜の週2回、

実施時間は15～17時と看護師が申し送りなどで患者のベッドサイドに行きにくい時間帯とし、対象者一人あたりのケア時間は20分を目安に、当日の看護学生ボランティアの人数などに応じて、一日に2～4名程度を対象者とすることとした。

HELP in SLの対象者は70歳以上の者で、長期入院による抑うつ状態の悪化がある者、活動性が低下した者、昼夜逆転している者、入院前から認知症があり、症状の悪化が懸念される者などとした。HELP ボランティアは看護学生であり、老年看護学や老年看護学実習を経験している者あるいは、看護師資格を持ったスタッフではないため、対象者の安全面も考慮し、認知症の行動心理症状(BPSD)が顕在化している者、せん妄症状が強い者は対象外とした。

2015年7月に看護部ナースマネジャー、HELP in SLの対象2病棟の看護スタッフ、および診療科医師に対して、HELP in SLの説明と運用方法についての説明を行い、理解と協力を得た。また導入に向けて対象者リーフレットの取り扱いについて総務課と検討し、アクティビティに使用する道具については、医療安全担当者と感染管理上の留意点などの相談・調整を行った。8月には具体的な運用と手順、コーディネーターと看護学部教員との役割を最終確認し、9月にはアクティビティ用具の設置場所の確保をすすめ、具体的な対象者の選定を行い、9月15日より試行を開始した。

具体的な方法としては、前日までに各病棟のオレンジの会メンバーであるHELP in SL担当者と、HELP in SLコーディネーター間で対象候補者の打ち合わせを行い、HELP in SLコーディネーターが前日までに対象者、および家族等に説明し、同意を得ることとした。当日には、対象者の心身状態に問題がないことを確認し、看護学生ボランティア、および看護学部老年看護学のインチャージ教員に対象者を紹介し、ベッドサイドに同行するという方法により、HELP in SLを実施している。HELP in SLの特徴は、ボランティアは全て看護学生であること、実施回数は週2回で一日につきベッドサイドへの訪問は1回とすること、老年看護学教員がチームに加わって活動している点である。

IV. HELP in SL を導入した事例と対象者の反応

本人、あるいは家族、および担当医が同意の上、HELP in SLを試行導入した対象者の概要は表1に示した。年齢は82～100歳の範囲で、平均年齢は91.5±7.7歳、性別はすべて女性であった。開始から約1カ月で6名の対象者に対し、延べ20回のHELP in SLを実施した。看護学生ボランティアは延べ22名が参加した。インチャージ教員は4名がローテーションして看護学生ボランティアと病

棟に同行した。対象者の在院日数は2～26日と幅があり、HELP in SLの提供回数は、1～10回であった。

事例1は、新聞の「天声人語」欄を読むことが日課であったが、入院後は新聞を読む機会がなくなっていた。新聞を読んでほしいとの希望があったため、HELP in SLコーディネーターは毎回新聞を用意し、看護学生ボランティアが新聞の読み語りをベッドサイドで行った。初回には、看護学生ボランティアと対象者の双方に緊張した表情が見られたが、2回目以降では、対象者は看護学生ボランティアとの日常的な会話をしながら、新聞記事を読んだり、歌を歌うなど、アクティビティを楽しむ様子が増えていった。看護学生ボランティアと対象者は身体を寄せて新聞記事に見入る様子があり、対象者の表情は和らいでいた。新聞記事をきっかけに、回想することもしばしばあり、若いころ仕事帰りに通った書道教室のことや、登山、ハイキングをしたときの思い出や風景を楽しく詳細に語り、看護学生ボランティアは対象者が笑顔で語る姿や内容に感心しながら、地域の様子などを知ることが楽しいと語っていた。対象者は、病室内のカレンダーにHELPの日程を書き込みHELP in SLが日課となっていた。

事例2は難聴があり、昼夜の感覚に乏しく、記憶力も落ちていた。初回は「今日はいいお天気ですよ」とカーテンを開けようとした学生に「閉めといて」と話した。家族がHELPの目的を紙に書くと理解した様子で、出身地のことや、麻雀が得意なことなどを話し、家族からは、「入院してから話し相手がいないことが気がかりだった。家の者は長く面会できないので、このような活動があると助かります」と評価された。HELP終了後にせん妄症状が出現したためHELPは一時休止となったが、その後症状が消失したため再開となった。

事例3は、ゆったりとアロマを用いたハンドケアを実施したところ、リラックスした表情を見せた。

事例4は、若い頃ダンスが趣味であったことを語り、昔の自身の写真を見ながら、看護学生ボランティアに着物でダンスをした時のことを生き生きと語った。「芸者ワルツ」の歌詞カードを目で追いながら、看護学生ボランティアと共に大きな声で歌う様子があり、「アンコール」も行うなど、楽しい時間を過ごしていた。家族からは、「母親の新たな一面を知った」との反応があった。

事例5は、几帳面な性格であり、椿油での整髪を希望した。看護学生は、対象者に整髪の方法を聞きながら丁寧に整髪し、整髪後に「きれいになりました」と看護学生ボランティアが伝えると、対象者は手鏡を見ながら嬉しそうな表情を浮かべた。整容のあとは、意欲が上がった様子で、「歩きたい」と言い、看護学生ボランティアとインチャージ教員が対象者の左右で歩行を介助し、HELP in SLコーディネーターが車いすを用意して後ろから追

表1 HELP を試行導入した対象者の概要と看護学生ボランティアの振り返り (2015年9月15日~10月27日)

項目	対象 No. 1	2	3	4	5	6
年齢(歳)	83	100	98	90	96	82
性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性
主傷病名	腰椎圧迫骨折	左大腿骨頸基部骨折 (保存療法)	腰痛	脱水症	尿路感染症	腎不全
HELP 開始時の 在院日数	26日	7日	8日	11日	4日	2日
HELP 導入期間 と提供回数	43日/11回	7日/2回	3日/2回	3日/2回	3日/2回	1日/1回
HELP 提供内容	・新聞記事の読み語り、切抜き ・オセロゲーム	・昔の写真を用いた 回想法	・アロマハンド・ フットケア	・昔の写真を用いた 回想法 ・歌を歌う	・整髪、整容 ・廊下の介助歩行	・アロマ足浴
対象者の反応	・カレンダーに HELP の日程を書 き込み、楽しみに している ・新聞記事から、自 身の過去の回想に 入る ・HELP の後半のほ うが表情が明るい ・天声人語ノートを 用意して、切抜い た記事を貼るなど、 前向きな姿が見ら れる	・HELP の目的がわ からず、最初は戸 惑った様子が見ら れ、家族が再度説 明し理解が得られ た ・難聴のため、紙 コップを耳元に近 づけて麻雀や家族 の話を楽しむ ・昔の写真からの回 想は出なかった ・HELP in SL 開始 後にせん妄出現の ため一時休止し、 その後再開	・看護学生ボラン ティアと触れ合う アロマケアによっ て、「気持ちが良い 」と発言 ・腰痛があるが、表 情が笑顔になる	・当時のダンスパー ティの様子につい て生き生きと語り、 笑顔が見られる ・対象者が生き生き と語る姿を家族 (娘)が嬉しそうに 見ている	・椿油で整髪し、鏡 の中の自分を見つ め、学生に感謝を 伝える ・2回目の訪室時に 「歩きたい」と話 し、廊下を介助歩 行する	・痰がらみのある咳 があり、臥位のま ま足浴を希望され る ・「いい香り」「気持 ち良い」との反応 で、表情が和らぐ
看護学生ボラン ティアによる振り返りの 記述(抜粋)	・ボランティアから 対象者に何かをし て差し上げるとい う一方だけでなく、 対象者も気配り、 もてなしてくれて いることを強く感 じた ・看護職とはまた違 う+αの能力も必 要 ・新聞の読み語りを きっかけに、対象 者の思いや過去を 知り、新聞は会話 のための道具(手 段)であるとわか った	・学生がきた目的が わからず戸惑って いたが、毎回説明 書きを見せるとス ムーズに進むと感 じた	・対象者がとても気 持ちよさそうにし てくれ、こちらも 元気をもらった ・話し相手がいるだ けで喜ばれていた	・対象者が元気に 歌ったり、お話を している様子をみ ていた娘さんが嬉 しそうにしていた のが印象的だった ・沢山笑顔を見るこ とができたのでう れしく思った	・対象者により結果 を伝えるととても 喜んで笑顔もみ られ、私たちが新し い一面をみるこ とができて嬉しか った ・「歩く練習がした い」と高齢者の方 でも回復する力を 持っていることが わかり感動した ・髪を整えると鏡を しっかりと見つめ 表情がキリッと なった姿を見て、 女性にとって身支 度は大切だとわか った	・足浴をすることで 対象者との距離が 少しか減ったよう に感じられてよ かった

う形で、病棟の廊下を歩行することができた。

事例6は入院後間もなく、下肢の浮腫が見られたが、アロマオイルを取り入れた足浴を行うと「気持ち良い」と表情が和らいでいた。

各々1回30~45分程度のアクティビティではあるが、対象者の反応から、看護学生ボランティアとの触れ合いや会話、また対象者の意思を尊重したケアにより、心地よい時間を共に過ごす様子が観察された。実施終了後には、看護学生ボランティアが報告シートに記録を行い、担当看護師に報告を行い、フィードバックを受けるようにしている。

V. 考察

これまでもHELPの有効性は多数報告されてきたが、わが国においては導入が進んでいない現状があった。その理由には、日本の医療文化には、市民ボランティアが入院患者のベッドサイドを訪問して、アクティビティなど直接的なケアを提供することに関する抵抗感があるためではないかと推察される。実際、本学でも、数年前にも検討を行ったが、その時には導入に至らなかった。しかし、今回看護学生から希望が上げられたことは教員、看護部双方にとって、HELP in SLを実現する上での大

きな原動力になった。また、看護学生ボランティアの中には、海外で HELP を実践している医療機関の見学を行ってきた者もあるなど、関心の高さがうかがわれた。看護学部教員は看護学生とともに実践ガイドの作成や使用するアクティビティ用具やエプロンの選定・購入などをすすめ、それをもとに、看護部側に具体的な方法を提案し、相談を進めていく両者をつなぐ役割をとることができた。また、看護部、教員がともに高齢者ケアについて学習する場であるオレンジの会があり、両者の意思疎通を図りやすく、HELP の理念と認知症高齢者への看護の質を向上させたいという看護部の思いが合致し、看護管理室においてのコーディネーターの人選もスムーズに運ぶことができた。また、病棟スタッフの理解が得られたこと、ボランティア確保とその教育に関する問題が生じなかったこと、老年看護学教員は実践ガイドの編集や開始までに必要な細部の準備を進めるなど、HELP in SL の実現に向けた、双方の協働をはかることができた点が早期の導入に至った大きな理由であったと考えられた。

病棟での試行導入例からは、1回30～45分程度の治療的アクティビティではあったが、ベッドサイドで看護学生ボランティアが対象者にじっくりと向き合い、触れ合いながら会話を楽しみ、また対象者の意思を尊重し、希望に即したケアを提供することができ、両者が心地よい時間を共有する様子が観察された。このような様子は、HELP in SL の回数を重ね、対象者と看護学生ボランティアとの心理的距離が狭まるほどに見られるようになっていた。また、看護学生ボランティアの記録からは、「対象者が（足浴を）気持ち良いと喜んで下さったので嬉しかった」「笑顔をたくさん見ることができて嬉しい」など、HELP の活動を通じた、肯定的な感情が記述されていた。このことから、HELP in SL は看護学生ボランティアにとっては高齢者への肯定的なケア体験の場となっていた。

以上から HELP in SL は入院高齢者と看護学生ボランティア双方にとって有用であることが示され、この形式による HELP in SL は、看護系大学と病院間の新たな協働モデルとなり得るものと考えられた。今後、HELP in SL の有効性を評価する研究的取り組みを進めていきたい。

VI. 結論

聖路加国際大学看護学部老年看護学と聖路加国際病院看護部、看護学生ボランティアによる HELP in SL チームを組織して、2015年9月から2病棟で試行を開始した。その結果、HELP in SL は、対象者の入院生活に心地よい時間を提供し得るものであり、かつ看護学生ボランティアにとっても肯定的なケア体験の場となること、また、看護学部と病院間の新たな協働モデルとなり得ることが示唆された。

謝 辞

本事業は2015年度聖路加国際大学教育改革推進事業の採択を受けて実施した。HELP in SL の導入に際しては、看護管理室、看護部オレンジの会の皆様、聖路加国際病院5階西病棟、5階東病棟のスタッフの皆様、聖路加国際大学看護学部学生の皆様と看護学部老年看護学教員との連携により実現することができました。ここに深く感謝申し上げます。(©1999 Hospital Elder Life Program, LLC.)

引用文献

- 1) Inouye, S. K., Bogardus, S. T. Jr., Charpentier, P. A., Leo-Summers, L., Acampora, D., Holford, T. R., & Cooney, L. M. Jr. (1999). A multicomponent intervention to prevent delirium in hospitalized older patients. *The New England Journal of Medicine*, 340 (9), 669 - 676.
- 2) Inouye, S. K., Bogardus, S. T. Jr, Baker, D. I., Leo-Summers, L., & Cooney, L. M. Jr. (2000). The Hospital Elder Life Program : a model of care to prevent cognitive and functional decline in older hospitalized patients. *Hospital Elder Life Program. Journal of the American Geriatrics Society*, 48, 1697 - 1706.
- 3) Hospital Elder Life Program (HELP) for Prevention of Delirium. <http://www.hospitalelderslifeprogram.org>. [2015年10月26日]
- 4) Bradley, E. H., Webster, T. R., Schlesinger, M., Baker, D., & Inouye, S. K. (2006). Patterns of diffusion of evidence-based clinical programmes : a case study of the hospital elder life program. *Quality & Safety in Health Care*, 15, 334 - 338.
- 5) Caplan, G. A., & Harper, E. L. (2007). Recruitment of volunteers to improve vitality in the elderly : the REVIVE study. *Internal Medicine Journal*, 37, 95 - 100.
- 6) Rubin, F. H., Neal, K., Fenlon, K., Hassan, S., & Inouye, S. K. (2011). Sustainability and scalability of the hospital elder life program (HELP) at a community hospital. *Journal of the American Geriatrics Society*, 59 (2), 359 - 365.
- 7) Bradley, E. H., Schlesinger, M., Webster, T. R., Baker, D., & Inouye, S. K. (2004). Translating research into clinical practice : making change happen. *Journal of the American Geriatrics Society*, 52, 1875 - 1882.
- 8) 本田美和子. (2011). 入院中の高齢者のせん妄をボランティアの介入で防ぐ, *週刊医学界新聞*, 2950.
- 9) オレンジの会. (2014). 認知機能に障害を持つ患者の実態調査資料, 聖路加国際病院看護部オレンジの会.